あいおいニッセイ同和損保
ザ・フェニックスホール 情報誌

THE PHOENIX HALL

Salon

Vol.103 2016年7月 夏号

ホール3Fアーティストラウンジ内壁画 ポール・ギアマン作「馬とヴァイオリン」

CONTENTS

01 Prime Interview — 石橋栄実
03 Phoenix Presents — 伊東信宏 企画・構成 レクチャーコンサート 声のような音／音のような声 三輪眞弘作品集
06 Pick Up — 今井信子presents アルト・ザ・デュオ ヴィオラ・声・ピアノで綴る「歌」
07 Essay de say — アメリカでのチェロとの出会い 辻本 玲

あいおいニッセイ同和損保

抒情と情熱、軽妙洒脱
―関西拠点にオペラで大活躍
石橋栄実さん

ソプラノ歌手・石橋栄実さん。母校・大阪音楽大学のザ・カレッジ・オペラハウスをはじめ、新国立劇場や大阪国際フェスティバルなど内外のオペラ舞台に出演を重ねる実力派、時に抒情と情熱に溢れ、時に軽妙洒脱な歌唱表現で観衆を魅了し続ける実力派だ。関西拠点に活動を展開してきた歌姫も、2年後にはデビュー20年を迎える。11月4日(金)午後のフェニックス公演は、十八番のオペラアリアや、思い入れのある日本の歌でプログラムを編んだ(左下参照)。中堅からベテランへ。「節目」を控えた胸に去来するものは何か―。初夏、快晴の午後、音楽大学のキャンパスに彼女を訪ね、オペラに寄せる思いを伺った。

(取材・文／谷本 裕＝沖縄県立芸術大学教授)

ティータイムコンサート「**石橋栄実 ソプラノの世界**」は2016年11月4日(金)午後2時開演。ピアノは、大阪音楽大学准教授の藤井快哉。茶菓付きで、入場料は、一般3,000円(友の会2,700円)、学生1,000円(限定数。ザ・フェニックスホールチケットセンターのみお取り扱い)。チケットのお求め、お問い合わせは同センター(電話06-6363-7999 土・日・祝を除く平日午前10時～17時)。

■プログラム
中田喜直:私に歌をください
林 光:ほうすけのひよこ
團伊玖磨:歌劇『夕鶴』から
「与ひょう、体を大事にしてね」
プーランク:歌劇『ティレジアスの乳房』から
「いいえ、旦那様」
松村禎三:歌劇『沈黙』から
「モキチと一緒に死にたか」
～水磔(すいたく)の場面　ほか

いしばし・えみ　大阪音楽大学専攻科修了。大阪舞台芸術奨励賞、音楽クリティック・クラブ奨励賞、坂井時忠音楽賞、咲くやこの花賞ほかを受賞。1998年ドイツ・ケムニッツ歌劇場「ヘンゼルとグレーテル」グレーテル役で招聘出演。それ以降、オペラに多数出演。近年では、2015年新国立劇場「沈黙」オハル、大阪国際フェスティバル「ランスへの旅」コルテーゼ夫人、ザ・カレッジ・オペラハウス「ファルスタッフ」ナンネッタ、2016年京都ロームシアターオープニング「フィデリオ」マルツェリーネを好演。今後も、9月いずみホール「ドン・ジョヴァンニ」ドンナ・アンナ、11月新国立劇場「ラ・ボエーム」ムゼッタなどへの出演が決まっている。宗教曲のソリストを務めるほか、NHK名曲リサイタルや、NHK大阪開局80周年記念「ラジオ歌謡とその時代」テレビ出演など、幅広く活動している。大阪音楽大学付属音楽院ジュニアコーラスPaPaPa講師。大阪音楽大学准教授。

稽古場で悟る「真の自信」

Emi Ishibashi

1998年。デビューはフンパーディンクの『ヘンゼルとグレーテル』だった。大阪音楽大学専攻科を修了し、間もなかった新人はその後、内外でキャリアを積む。新国立劇場主催公演に重ねて招かれ、昨春は大阪国際フェスティバルの国際共同制作『ランスへの旅』で内外の名手ともども起用されるなど、着実に活動を広げてきた。

本当にあっという間でした。よく続いてきたなぁ、という感慨もあります。オペラは、望んでも出られる訳ではありません。自分を見い出してくれる人が世の中に居られ、求められたら謹んでお受けする。そんな「縁」が欠かせないのです。私は、先のことはあまり考えない。いただいた、目の前の仕事をきちんと果たそうと努めてきました。その一つひとつが、幸いにも「次」に繋がってきたんだと思います。

近年の石橋さんは、舞台で役そのものを生きている印象があります。心技体の安定を感じますが、デビュー当時はいかがでしたか。

ゲネプロ（本番直前の総合リハーサル）が近づいてくると、本当にどうかなってしまいそうな感じでした。ご飯が食べられない。訳もなく涙が出てきたりして、生きた心地がしない。命まで縮まるようで「この本番を終えたらもう辞めよう」と何度も思いました。でも今は、そんなことはなくなりました。舞台に対する恐怖感、緊張感に変わりはないですが、若い時代に苦労した歌も楽に歌えるようにもなり、心臓に毛が生えたのかも（笑）。

何か契機があったのでしょうか。

オペラ『沈黙』（＊1）の経験も大きかったと思います。演じてきたのは、迫害を受け殉教する男の恋人、オハル。2003年以来、大阪と東京で10回もの舞台を重ねてきました。ピアニストと私の二人きり、「自分のハート」で比較的自由に歌える歌曲のリサタイルとは違い、オペラは多くの仲間とつくり上げる。そして「役そのもの」が歌う面が、より強い。演じる中で苦しくなったり、心が震えたり。涙が出てしまうこともありますが、練習でも本番でも普通は、まず歌い通せる。感情の抑制が出来るんです。でも新国立劇場の「沈黙」に限っては、初日の練習で出演者全員がヒクヒク泣いてしまい、声にならないということがありました。

プロの世界では珍しいでしょうね。

『沈黙』だけですね。音楽の力が大きいんです。苦しい。悲しい。そして美しい。歌う中、自分の感情が高ぶってきて、頂点に達するその瞬間、「止（とど）め」を刺すような音が現れ、涙腺が決壊してしまう。稽古場全体が、すすり泣きに包まれる。そんな強烈な感動を仲間が感じ、共有出来る不思議な体験でした。

「修羅場」をくぐり、何かが変わった…。

『沈黙』は極端な例かもしれません。他の作品でも稽古場でしか生まれず、また味わえない特別な感覚を経験していくうち、「オペラづくりの現実」を知り、学んだんだと思います。オペラの「役」というのはまず、作品の音楽を手掛かりに、私自身が探り、創る作業があります。響きの中で気持ち良く歌えるようになったら、役柄は或る程度、自然についている。その上で、稽古場に入ってのち、色んな人々とのやり取りを重ねて徐々に定まっていくものでもある。稽古初日、キチンと歌える状態まで自分を整えておくのは当然ですが、演技、役つくりについては真っ白・まっさらというか、例えば演出家の方の様々な求めに応じ、いかようにも即応できるよう、自分なりに考えられる限りの準備をして臨む訳です。

オーケストラの指揮者と楽員の関係みたいですね。

歌手の表現に対する要求が、前日と違う。そういうことは少なからずある。でも私たち歌手は「昨日はこう仰ってました」なんて言いません。その時点の私の役づくりに向けて、それは違う、という求めが出てくる。或る水準まで「上がって来い」と求められ、やっとの思いで付いて行ったら、そこで相手のファンタジーがまた変わる、広がる。稽古場って、そういう所です。逆に、本番の2週間も前に「あぁ、もうそれで良いですヨ」なんて言われると、却ってどうしたら良いか分からなくなるんです。演じる歌手が優れていれば、演出家はその表現に触発されて新たな発想、役のイメージを持って下さるはず。オペラに関わる者同士の「連鎖反応」というのか、一つのらせん階段を一緒に上っていくような営み。そこに加わり、色んな試みを探る中でこそ、私も成長し、「自信」を持てるようになっていく。それを悟ったんでしょうね。

そんな『沈黙』の中の1シーンを今回、歌っていただきます。

困難に遭って苦しんでいる。過酷な境遇の中でも愛を貫き、叫びにも似た悲恋を全身全霊で歌う。そんなオハルの姿は、『夕鶴』（＊2）のヒロインである「つう」にも共通するかもしれません。でも私、若い頃はそうした清楚な役とは真逆のキャラクターも演じていました。演目でいえば『コシ・ファン・トゥッテ』のデスピーナとか、オペレッタ『こうもり』のアデーレとか…。おきゃんで、少々蓮っ葉なところもある娘。こうしたキャラクターは、「素」の自分とは全く別なんですが、歌い手としての自分にはとてもピッタリの役だと思います。11月、新国立劇場で演じる『ラ・ボエーム』（＊3）のムゼッタも、直感というか、心に浮かんだ言葉を反射的に口に発するタイプ。加えて、まだちょっぴり青さの残るお色気を、明け透けに振りまく。こういう役は経験がありません。実はフェニックスの舞台の翌日、その稽古に入ります。役づくり、一体どうしましょ（笑）。

問題ないようにも思いますが…。

年齢相応に声も成熟してきました。もちろん、衰えるにはまだ早過ぎる。「充実の時」を迎えた今、歌のクオリティに関し、言い訳は絶対出来ません。磨かなくてはならないことがたくさんある。もっと自分に厳しくしなければ。

リサイタルでは日本の歌も歌っていただきます。林光さん作曲の『ほうすけのひよこ』は、詩人・谷川俊太郎さんの手になる物語仕立て。面白そうです。

10年前、出産を控えた頃に半年弱、仕事を休んだ時期があったんです。まとまった休暇は、普段とれません。「今しか出来ないチャンス」と捉え、日頃、取り組みたいと考えていたテーマを、ノートに書き出しました。リストは2ページ分にも及び、出来るものから一つひとつ、お腹の子と一緒に勉強したんです。例えば、モーツァルトの『フィガロの結婚』の台本を原語で読み直す。シューマンの歌曲集『女の愛と生涯』のおさらいをする。この『ほうすけのひよこ』も、リストに入っていました。村外れに独りで住む純朴な男と、村人の間に或る事件が持ち上がる。人が人と生きることの温かさや哀しさ、その無常を静かに語りかけるストーリー。音楽もシンプルで伝わりやすい。原作の絵本を買って想を練り、産後初のリサイタルで実際に歌いました。世の中には、だれもが悪くないのに人を傷つけてしまう時がありますよね。それは実は、『沈黙』や『夕鶴』でも私が感じているテーマ。現代に生きる私たちが、考えてみるべきことが、たくさん含まれているように思います。豊かな詩と音楽に触れ、お客様が幼い頃の思い出と結び付けて、ゆったり聴いて下さると嬉しいです。

（＊1）1993年。原作は遠藤周作の小説。松村禎三が脚本と作曲を手掛けた。江戸時代、長崎で行われたキリスト教の弾圧を題材に、神の存在や信仰の意味を問うている。
（＊2）1952年。日本の民話「鶴の恩返し」に基づく木下順二の戯曲を台本に、團伊玖磨が作曲。
（＊3）1896年。プッチーニ作曲。

■レクチャーコンサートシリーズ27

2016年
12月25日(日)

16:00開演　指定席
一般¥3,000(友の会価格¥2,700)
学生¥1,000(限定数)

伊東信宏 企画・構成　レクチャーコンサート
声のような音／音のような声 三輪眞弘作品集

出演　三輪眞弘(講師:情報科学芸術大学院大学(IAMAS)教授)
丸谷晶子(ソプラノ)　岡野勇仁(MIDIアコーディオン)　フォルマント兄弟(三輪眞弘+佐近田展康)　ほか

曲目　三輪眞弘:言葉の影、またはアレルヤ　合唱曲 新しい時代 The New Era　ポップソング wach jetzt auf!
再現芸術における幽霊、またはラジオとマルチチャンネル・スピーカーシステムのための、新しい時代
独唱曲「訪れよ、我が友よ」+「新しい時代」　独唱曲「天使の秘密」　フォルマント兄弟の「スターバト・マーテル」(予定)

作曲家、三輪眞弘さんの作品には、いつも驚かされます。奇妙なルールで進行してゆく儀礼のような音楽、あるいは「…という夢を見た」という設定の人を喰った音楽、などなど。また、MIDIキーボードを使って、合成音をその場でコントロールして、歌声として発音させる、「フォルマント兄弟」としての作品群もあります。かつて三輪さんが書いた驚くべきオペラ「新しい時代」(2000年初演)を再演する、という夢も視野に入れて、三輪さんの世界を紹介したいと思います。　伊東信宏(大阪大学教授、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール音楽アドヴァイザー)

三輪眞弘(みわ・まさひろ／講師:情報科学芸術大学院大学(IAMAS)教授)

1958年東京生まれ。1974年都立国立高校入学以来友人と共に結成したロックバンドで音楽活動を始める。1978年渡独、国立ベルリン芸術大学で作曲をイサン・ユンに師事。1985年より国立ロベルト・シューマン音楽大学でギュンター・ベッカーに師事する。佐近田展康と共に「フォルマント兄弟」としての創作・思索・講演活動や、CDアルバム「村松ギヤ(春の祭典)」(2012)リリースなどその活動は多岐にわたる。著書に「コンピュータ・エイジの音楽理論」(1995)、さらに「三輪眞弘音楽藝術－全思考1998-2010」により2010年度第61回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。現在、情報科学芸術大学院大学(IAMAS)教授。旧「方法主義」同人。

丸谷晶子(まるたに・あきこ／ソプラノ)

英国トリニティ音楽院大学院で古楽声楽を専攻、ディプロマを得て修了。ロンドン・日本でソロリサイタル、音楽祭などに出演。E・カークビー、E・タブ各女史に師事。エラキドニーコンクール2位。中世・ルネサンス・バロック音楽(古楽)を中心に、アイルランドなどのケルト伝承音楽、日本・イギリス現代曲にも取り組む。“声と歌で五感を愉しみ、心が感じる音を奏でる『かたりおと』プロジェクト”を実施。演劇、朗読、絵画、アロマ(芳香浴)などと共に全国で展開。ラジオ、テレビ、コラム執筆、レクチャーコンサート、学会での実演などで、様々な「歌の世界」を紹介している。CD「やわらかな風に吹かれて」が「伝統的なケルトのエアー(歌)に新しい魂が吹き込まれ、心地よい透明感に癒される一枚」として好評を得る。アヴァロン音楽教室主宰。http://avalon-am.com

岡野勇仁(おかの・ゆうじん／MIDIアコーディオン)

東京音楽大学ピアノ科卒業。ピアノを田村宏、伊藤恵、藤井一興、草川宣雄、高橋アキ、斉藤雅広の各氏に師事。リサイタルのほか、南米音楽演奏、美術家や詩人、ダンサーとの共演、紙芝居、フリーインプロヴィゼーション、クラブミュージックやエレクトロニクス、アートプロジェクト、日本やアジアの歌の演奏など類例をみない多彩な活動をおこなう。「フォルマント兄弟」の作品「NEO 都都逸」「せんだいドドンパ節」をキーボード演奏で「夢のワルツ」をMIDI アコーディオン演奏で世界初演。フォルマント兄弟の合成音声歌唱作品をMIDIアコーディオンやMIDIキーボードで演奏している世界でも唯一の演奏家。フランス音楽コンクール第2位、第9回日本室内楽コンクール入選、現代音楽コンクール《競楽4》入選、尚美ミュージックカレッジ専門学校ピアノ学科専任講師。

ホール主催・共催・協賛公演チケットのお申込み方法

06-6363-7999
土・日・祝日を除く平日の10:00～17:00

■ザ・フェニックスホール友の会優先予約
- ザ・フェニックスホール友の会会員様の優先予約日です(電話予約のみ)。
- 主催公演1公演につき会員お1人様2枚まで1割引でお求めいただけます。チケット購入の際、枚数制限はありませんが、3枚目以降は一般価格となります。
- 友の会への入会をご希望の方は、チケットのお申込み時にお電話でお申しつけください。同時に優先予約をお受けすることができます。その際、年会費1,000円が別途必要となります。

■E-PHX(イー・フェニックス)優先予約
- E-PHX(イー・フェニックス)にご登録の方の優先予約日です(電話予約のみ)。
- チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。
- 事前にザ・フェニックスホールホームページ、ホール会員のページからご登録ください。お電話でのご登録はできません。

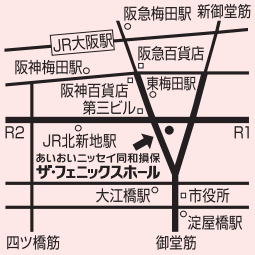
■一般発売
- 一般発売日は、電話予約のみのお申込みとなります。
- チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。

http://phoenixhall.jp/
チケットセンターのページからお申込みください

■インターネット予約 (主催公演のみ)
- ザ・フェニックスホールホームページ、チケットセンターのページからお申込みください。
- チケット予約フォームに記載のない公演につきましてはおそれ入りますがお電話でお問合せください。
- ホームページ更新の都合により、完売表示のない公演でもお申込み時には完売となっていることもございます。どうぞご了承ください。
- 学生券のインターネットによるご予約は受付いたしておりません。
- チケットご予約フォーム送信後、営業日3日以内に座席の有無、座席番号、入金方法につきまして確認メールをお送りいたします。

直接のご来店による お申込み

- ザ・フェニックスホールチケットセンターはホール建物5階、エレベーターを降りて廊下右手です。



チケットお申込み後のお受け渡し方法
下記①または②のどちらかとなります。

①お申込み日から10日以内にザ・フェニックスホールチケットセンターへご来店ください。
営業時間は土・日・祝日を除く平日の10:00～17:00です。

②先に郵便振込みをしていただき、入金確認後チケットをご郵送させていただきます。皆様のお手元にチケットが届きますのはご入金をいただいてから約10日後となります。その際、振込手数料はお客様にてご負担ください。尚、郵送は簡易書留(一律420円)のみとさせていただきます。

振込口座　00940-0-95351　　加入者名　ザ・フェニックスホール

7月29日(金)
10:00 受付開始
ザ・フェニックスホール 友の会優先予約

8月1日(月)
10:00 受付開始
イー・フェニックス E-PHX優先予約

8月2日(火)
10:00
一般発売
インターネット予約、ご来店による
お申込みは8月3日(水)10:00から!

■アンサンブル・ア・ラ・カルト60

2017年
1月19日(木)

19:00開演　指定席
一般¥4,500(友の会価格¥4,050)
学生¥1,500(限定数)

出演
今井信子(ヴィオラ)
波多野睦美(メゾソプラノ)
高橋優介(ピアノ)

仏語で、中音域の声とヴィオラの意味を併せ持つ「アルト」。名手達の「響鳴」の粋。

今井信子presents
アルト・ザ・デュオ ―ヴィオラ・声・ピアノで綴る「歌」

曲目　シューベルト:ソナチネ ニ長調 作品137　ヘンデル:歌劇『ジューリオ・チェーザレ』より「涙のために生まれ」
スクリャービン:ピアノソナタ 第2番「幻想」嬰ト短調 作品19　マスネ:エレジー
フランク:シルフ(空気の精)　ウォルトン:歌曲集「3つの歌」　ブリッジ:アルトとヴィオラのための3つの歌
ブラームス:アルト、ヴィオラとピアノのための2つの歌 作品91　(予定)

高橋優介さんは、芸術家だけが持つ感性を具えたピアニストで、まだ若いながらまるで巨匠のようです。これからが楽しみな逸材です。波多野睦美さんは、鋭い感受性と洞察力を持った真の音楽家です。好きなものであればジャンル、慣習を飛び越えてとことん追求する、そういう方だと思います。このメンバーで、どんな音楽が作れるのか今からワクワクしています。是非、ご期待ください。
今井信子(ヴィオラ奏者、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール音楽アドヴァイザー)

©Marco Borggreve

今井信子(いまい・のぶこ/ヴィオラ)
1943年東京生まれ。桐朋学園大学を経て米国のイェール大学、ジュリアード音楽院に学び67年ミュンヘン、68年ジュネーヴの両国際コンクールで最高位入賞。以後、北イリノイ大学、英マンチェスター音楽院などの教員を務めながら演奏活動を広げ、89年秋、武満徹がフランス革命200年記念で委嘱されたヴィオラとオーケストラのための「ア・ストリング・アラウンド・オータム」をパリで初演、小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラとの共演で録音したCDがベストセラーとなった。87年の開館時からカザルス・ホールの音楽アドヴァイザー、90年からは同ホールのレジデント・クァルテット(カザルスホール・クァルテット)のメンバーとなった。同ホールでは91年からリサイタルをはじめ、翌年からは「ヴィオラという楽器の可能性を追求し、音楽性と素晴らしさを広めたい」との思いから「カザルス・ホール・ヴィオラ・スペース」と題したヴィオラのための音楽祭へと発展した。この事業ではヴィオラ奏者育成のためにマスタークラスを開催している。95年はヒンデミットの生誕100年を記念、東京、ロンドン、ニューヨークで開かれた国際ヴィオラ・フェスティバルの音楽監督を務めた。97年第1回淡路島しづかホール・ヴィオラ・コンクールの審査委員長。2003年ミケランジェロ弦楽四重奏団結成。2009年東京国際ヴィオラコンクール審査委員長。アムステルダム音楽院、クロンベルク・アカデミー、上野学園大学などで後進を指導、2015年10月からはスペインのマドリッドにあるソフィア王妃高等音楽院の教授に就任した。「エイボン女性芸術賞」、「芸術選奨文部大臣賞」、「京都音楽賞」、「モービル音楽賞」、「毎日芸術賞」、「サントリー音楽賞」を受賞。03年紫綬褒章、13年旭日小綬章受章。欧米を拠点にソリスト、室内楽奏者、教育者として国際的に活躍しているヴィオラの第一人者。ザ・フェニックスホールでは1997年5月、主催公演にクラリネット・トリオで出演(共演・フリードリヒ・ヴィルヘルム・シュヌア=ピアノ、エルマー・シュミット=クラリネット)。また、自らが企画に携わるヴィオラ振興のための音楽事業「ヴィオラスペース」(主催・テレビマンユニオン)が2005年から毎春、ザ・フェニックスホールで開催されている。11年4月からあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール音楽アドヴァイザー。

©Toshiyuki Kohno

波多野睦美(はたの・むつみ/メゾソプラノ)
宮崎大学教育学部卒業後、英国ロンドンのトリニティ音楽大学声楽専攻科修了。シェイクスピア時代のイギリスのリュートソングでデビュー、国内外で多くのコンサート、音楽祭に出演し、CD作品を発表、リュートソングの魅力と新たな可能性を示し、海外でも高い評価を得る。ソリストとしてのレパートリーは柔軟で幅広く、バロックから現代に至る。ヘンデル「メサイア」、バッハ「マタイ受難曲」などのソリストとして、鈴木雅明、クリストファー・ホグウッド、寺神戸亮指揮の多くのバロックオーケストラと共演。日本、英国の近現代歌曲にも積極的に取り組み、鋭敏な言語感覚、魅力的な人物像の表現と心安らげる声で聴く人に深い印象を刻む。作曲家から厚い信頼を得て、間宮芳生作品のアメリカでの世界初演、水戸芸術館での「高橋悠治の肖像」、サントリーホールでの「作曲家の個展:権代敦彦」などに出演。サイトウキネンフェスティヴァルの武満メモリアルコンサートにも出演している。モンテヴェルディ「ポッペアの戴冠」のオッターヴィア、「オルフェーオ」のメッサジェーラ、パーセル「ダイドーとエネアス」のダイドー、モーツァルト「イドメネオ」のイダマンテ、間宮芳生「ポポイ」など、オペラでも存在感と深い表現力で注目される。放送では「NHKニューイヤーオペラコンサート」「名曲アルバム」「日本の叙情歌」「題名のない音楽会」などに出演。CD作品では「パーセル歌曲集/ソリチュード」など古楽器との共演による多数の録音のほか、作曲家・ピアニストの高橋悠治との共演で「ゆめのよる」「猫の歌」「風ぐるま」を発表。最新作で古楽器との共演による「イタリア歌曲集」は「レコード芸術」で特選盤となるなど、各方面から高い評価を受ける。国際基督教大学非常勤講師。

高橋優介(たかはし・ゆうすけ/ピアノ)
1993年千葉県生まれ。上野学園高等学校卒業、上野学園大学演奏家コース修了。現在、上野学園大学音楽学部専攻科在籍。第10回東京音楽コンクール第1位及び聴衆賞受賞。これまでに、上野学園管弦楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団と共演。齋藤由里子、横山真子、宮本玲奈の各氏に師事。現在、横山幸雄、久保春代、川田健太郎の各氏に師事。芸術・文化若い芽を育てる会第5回奨学生。

■フェニックス・エヴォリューション・シリーズ79　　主催　田中正也×佐藤卓史　ウルトラ・ピアノデュオ事務局

2017年1月21日(土)

ウルトラ・ピアノデュオ　88×88=田中正也×佐藤卓史「宙で生まれる響きのスペクタクル」

18:00開演　指定席

一般S席前売・当日
¥4,000(友の会価格¥3,600)

一般A席前売・当日
¥3,500(友の会価格¥3,150)

一般B席前売・当日
¥2,500(友の会価格¥2,250)

学生前売・当日　¥1,500

※友の会割引は1会員につき2枚まで。

出演　田中正也、佐藤卓史(以上ピアノ)

曲目　アルチュニアン、ババジャニアン：アルメニア狂詩曲　　シューベルト(プロコフィエフ編)：ワルツ集
ストラヴィンスキー(バビン編)：「ペトルーシュカ」から3つの楽章
ラヴェル：ラ・ヴァルス　　グレツキ：トッカータ　　デュティユー：響きの形

全く異なる音楽的土壌から生み出された両極の個性を持つ二人のピアニスト、田中正也と佐藤卓史が繰り広げる「宙で生まれる響きのスペクタクル」は、ホール1階席のセンターに舞台を設定し、客席からの距離を限りなく近くし、聴くことに視覚的なエフェクトを加えたコンサートです。「2台ピアノで描く20世紀の多彩な響き」に焦点を当てたプログラムを、二人の対話をはさんで進行していきます。とりわけデュティユー作曲「響きの形」には、ユニークな演奏法が出てきます。視覚的にも、聴覚的にも感動を生む必聴の一曲です。プロコフィエフをライフワークとする田中正也と、シューベルトを生涯の友とする佐藤卓史。異質な二人が宙で劇的な化学反応を起こし、新たな音世界を形成する瞬間をあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールの空間で共有していただきたいと思います。

©H.GAMACHI

田中正也×佐藤卓史　ウルトラ・ピアノデュオ

2005年3月ポーランド・ワルシャワでのスメンジャンカ女史のマスタークラスにて、モスクワ音楽院大学院在学中の田中正也と東京芸術大学在学中の佐藤卓史は、お互いの演奏を知る事となる。音楽教育の土壌を異にし、生来の性格や音楽的特質も正反対の二人が、5年後の2010年6月、兵庫県三木市文化会館・クラシック友の会主催“第51回”コンサートにて、デュオデビュー。2011年カントゥ国際ピアノコンチェルトコンクールにて、古典派部門で佐藤卓史が、ロマン派部門で田中正也が、同時に第1位に輝くという奇跡的快挙の後、さらに刺激し合い、名古屋・東京・広島・大阪・秋田・千葉など各地に招かれ、デュオ演奏会を重ねていく。宗次ホール(名古屋市)での「田中正也×佐藤卓史　超絶プレミアムデュオが贈る♪楽しいおしゃべりコンサート♪」は、演奏だけでなく二人の絶妙なトークも人気となり、2011年より継続開催されている。佐藤卓史編曲によるオリジナルレパートリーも幅広く、更なる活躍が期待されているデュオである。2015年12月にCD「鐘～ロシア～ピアノ・デュオの世界　田中正也＆佐藤卓史」がナミ・レコードよりリリースされ、2016年「レコード芸術」(音楽之友社)2月号で特選盤となる。

要申込み・受付開始 7/22(金)10:00

Osaka Guitar Summer 2016　関連プロジェクト

福田進一とジェレミー・ジューヴによる　公開マスタークラスと受講生修了コンサートの聴講募集開始

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールは2010年8月、ギターを軸に据えた継続的な音楽プロジェクト「Osaka Guitar Summer(大阪ギターサマー)福田進一と仲間たち」を創設しました。このプロジェクトは、福田さんと世界トップクラスの演奏家によるコンサートを中心とし、これら演奏家が次代を担う若者を指導、同時にギター演奏や音楽づくりの楽しさに触れて頂く「公開マスタークラス」と指導を受けた受講生のレッスンの成果を披露する「修了コンサート」を実施します。今回の修了コンサートには、芥川賞作家の平野啓一郎さんをゲストにお迎えし、福田進一さんとのスペシャルトークも実施します。聴講をご希望の方は、事前のお申込みをお願い申し上げます。

Osaka Guitar Summer

協賛
現代ギター社

〈公開マスタークラス〉

8月27日(土) 午後

8月28日(日) 午後

講師：福田進一
ジェレミー・ジューヴ

■入場料 無料
(要・入場券。当ホールチケットセンターのみのお取り扱い)
＊お一人2枚まで。

〈修了コンサート〉　8月28日(日) 夕

出演：公開マスタークラス受講生
スペシャルトークゲスト：平野啓一郎(小説家)

■入場料 500円 (友の会割引なし。当ホールチケットセンターのみのお取り扱い)

※詳細についてはホールホームページ
http://phoenixhall.jpをご確認下さい。

修了コンサートでは、演奏会の前に福田進一さんと平野啓一郎さんの対談を行います(約30分程度)。平野さんの新刊『マチネの終わりに』に関連して、平野さんとギターとの関係、好きなクラシック・ギタリスト、ギターの曲、音楽を小説に書く際の苦労や工夫などをお話いただきます。

平野啓一郎
(ひらの・けいいちろう／小説家)

©瀧本幹也

1975年愛知県蒲郡市生。北九州市出身。京都大学法学部卒。1999年在学中に文芸誌「新潮」に投稿した『日蝕』により第120回芥川賞を当時最年少で受賞。著書は小説、『葬送』『滴り落ちる時計たちの波紋』『決壊』(芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞)『ドーン』(ドゥマゴ文学賞受賞)『かたちだけの愛』『空白を満たしなさい』、『透明な迷宮』、エッセイ・対談集に『私とは何か「個人」から「分人」へ』『「生命力」の行方～変わりゆく世界と分人主義』等がある。2014年、フランス芸術文化勲章シュヴァリエを受章。2016年4月新作長編小説『マチネの終わりに』刊行。

■お申込み方法　ザ・フェニックスホールチケットセンター 来店もしくはお電話
TEL　06-6363-7999 (平日の10:00～17:00)
FAX　06-6363-1124　専用の申込み用紙に必要事項をご記入のうえ送信ください。
申込み用紙はホールホームページhttp://phoenixhall.jpよりご入手可能です。
WEB　https://f.msgs.jp/webapp/form/10897_ddq_52/index.do　　URLもしくはQRコードからアクセスください。

■会場　あいおいニッセイ同和損保
ザ・フェニックスホール

申し込みはこちら

■お問い合わせ　ザ・フェニックスホール「大阪ギターサマー事務局」　TEL　06-6363-0211(平日9時～18時)

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール協賛公演のご案内

ザ・フェニックスホール友の会会員の方には割引特典があります。
当日券をお買い求めの際は会員証をご提示ください。

協賛公演 関西二期会サロンオペラ 第13回公演「ランメルモールのルチア」

主催　公益社団法人関西二期会

発売中

2016年8月9日(火)・10日(水)　19:00開演　自由席　一般前売・当日¥3,000(友の会価格¥2,700)

出演　金 正奉(指揮)、髙木愛(演出)、蜷川千佳(ピアノ)、米田哲二(公演監督)
キャスト(9日):北野加織、瀬田雅巳、黒田まさき、山咲響、山﨑覚、岡島有里、青砥純司
キャスト(10日)熊谷綾乃、藤井零治、萬田一樹、吉田昌樹、鈴木信一、田中章子、青砥純司

曲目　ドニゼッティ
(S・カンマラーノ台本):
歌劇「ランメルモールのルチア」

毎回ご好評を頂いております関西二期会サロンオペラ。気軽にプロの演奏を楽しんで頂くことをテーマに公演を重ねてきました。第13回公演は主人公ルチアの歌う『狂乱の場』で名高い「ランメルモールのルチア」です。声の饗宴により繰り広げられる悲恋の物語を、歌手の息遣いまで感じられるザ・フェニックスホールの空間でお楽しみください。

協賛公演 辻本玲 チェロ・リサイタル

主催　フィリー企画

©竹原伸治

発売中

2016年10月13日(木)　19:00開演　自由席
一般前売¥3,000(友の会価格¥2,700)　一般当日¥3,500(友の会価格¥3,150)　学生前売¥1,500　学生当日¥2,000

出演　辻本 玲(チェロ)、永野光太郎(ピアノ)

曲目　ベートーヴェン:チェロソナタ 第1番 ヘ長調 作品5-1
ショパン:ノクターン 第20番 嬰ハ短調 遺作
フォーレ:3つの歌より“夢のあとに” 作品7-1
リスト:愛の夢 第3番 変イ長調 S.541
ラフマニノフ:チェロソナタ ト短調 作品19

ザ・フェニックスホールでは、フェニックス・エヴォリューション・シリーズ「Violoncelloの一人旅」から十年ぶりとなるソロリサイタル!ベートーヴェンのソナタ第1番から、チェロの魅力を最大限に発揮できるショパン、フォーレなどの小品を演奏し、メインは大好きなラフマニノフのソナタです。ロマンに溢れ、心に訴えかけるラフマニノフのメロディーを甘く、そして切なく歌いあげます!

協賛公演 長原幸太&アンサンブル天下統一 リサイタル

主催　長原幸太&アンサンブル天下統一リサイタル実行委員会

発売中

2016年10月23日(日) 14:00開演　自由席　一般前売¥3,500(友の会価格¥3,150)　一般当日¥4,000(友の会価格¥3,600)　学生前売・当日¥2,500

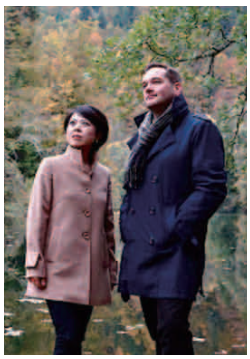
出演　長原幸太(ヴァイオリン)
鈴木康浩(ヴィオラ)
中木健二(チェロ)

曲目　J・S・バッハ:
無伴奏ヴァイオリンパルティータ
第2番 ニ短調 BWV1004
ゴルトベルク変奏曲(弦楽三重奏版)
ほか

圧倒的なサウンドと類まれなる存在感を放つヴァイオリニスト長原幸太が大阪に帰って来る。大阪フィル首席コンマス時代、熱狂の公演を繰り広げた姿は今もなお色褪せることがない。前半は長原の真骨頂・無伴奏ソロステージ、深遠なる世界へ。後半はヴィオラスペースでお馴染み鈴木康浩、ヨーロッパで最高の評価を受けたチェリスト中木健二と組む“アンサンブル天下統一”として、孤高の名曲「ゴルトベルク変奏曲(弦楽三重奏版)」を披露する。異空間の拡がりをお楽しみください。

協賛公演 ドイツリートの夕べ『詩人ハイネの世界』

主催　21世紀「歌の本」



発売中

2016年10月25日(火)　19:00開演　自由席　一般前売¥3,500(友の会価格¥3,150)
一般当日¥4,000(友の会価格¥3,600)　学生前売¥2,500　学生当日¥3,000　※友の会割引は1会員につき2枚まで。

出演　ラファエル・ファーヴル(テノール)
加藤哲子(ピアノ)

曲目　C・シューマン:僕は暗い夢にたたずみ
リスト:僕の歌は毒されている
ベルク:最愛の美しい女性
W・リーム:ハイネの「セラフィーネ」のために
(2006年) ※日本初演
R・シューマン:詩人の恋　ほか

ハインリッヒ・ハイネ (1797-1856) は、ドイツ・ロマン派を代表する詩人で、かの詩集『歌の本』は当時の作曲家を非常に魅了しました。ハイネほど、多くの作曲家に詩の曲付けをされた詩人はいません。作曲家ごとにハイネに対する見解が異なることから、同一の詩への曲付けにもかかわらず全く違った音楽世界が創り上げられており、今回の演奏会はそれを発見していただける構成となっております。私たちが目指すのは、一貫したテーマのもと、何ら制約のない音楽空間を作り上げ、聴く者にインスピレーションと創造空間を提供することです。ハイネとハイネをめぐる歌曲の世界を、日本の聴衆の皆さまと共有できれば大変光栄です。

協賛公演 藤井快哉ピアノリサイタル プレイズショパンII

主催　藤井快哉ピアノリサイタル実行委員会

発売中

2016年12月20日(火)　19:00開演　自由席　一般前売・当日¥3,000(友の会価格¥2,700)　学生前売・当日¥2,000

曲目　オールショパンプログラム
夜想曲 第8番 変ニ長調 作品27-2
スケルツォ 第2番 変ロ短調 作品31
ワルツ 第9番「告別」変イ長調 作品69-1
バラード 第1番 ト短調 作品23
3つのマズルカ 作品59
舟歌 嬰ヘ長調 作品60
幻想ポロネーズ 変イ長調 作品61

出演　藤井快哉(ピアノ)

ショパンの生涯を語る上で欠かせない人物、それは1838年から1847年までを共に過ごした文筆家ジョルジュ・サンドである。常識では計り知れないサンドの個性は、ショパンに計り知れない影響を与えた。では逆に、サンドに出会う前のショパンはどのような音楽を描いていたのか、そしてサンドと別れてから死ぬまでの2年間はどのような作品を残したのか。この興味深いテーマに挑むのが当公演最大の魅力である。

アメリカでのチェロとの出会い

辻本 玲

Keizo Matsui

私は父の仕事の関係で生後4ヶ月でアメリカ合衆国に渡り、フィラデルフィアで11歳まで過ごしました。そこには名門フィラデルフィア・オーケストラ（当時はリッカルド・ムーティが音楽監督でした）やカーティス音楽院などがあり、クラシック音楽には恵まれた環境でした。チェロを初めたきっかけになったのもカーティス音楽院でのチェロの発表会を聴きに行き、両親にチェロを勧められたからです。ちょうどその頃、テレビでチャイコフスキーのガラコンサートの模様が放映され、そこで若きヨーヨー・マが「ロココの主題による変奏曲」を演奏していました。それはそれは楽しそうに全身を使いながら、たまに指揮者にウインクしながら弾いているその姿に釘付けになり、私のスーパーヒーローになりました。チェロを弾く情熱はその瞬間に完全に消えないものになりました。

最初にチェロの手ほどきをしてくださったのは、カーティス音楽院でも教鞭をとっておられたオーランド・コール先生とアシスタントのメタ・ワッツ先生で、ワッツ先生は小さい子供を教えることに大変長けており、基本スタイルは先生と一緒に弾くと言うものでした。体で感じ耳で覚えるもので、楽しくチェロを始められたのを今でもよく覚えています。一見自由に見える教え方も、ビブラートなど、特に繊細なテクニック、悪い癖が付きやすいものは、ものになるまで家で練習するのは禁止されており、先生の前でしかやらないという厳しいルールもありました。いま考えるとすごく合理的なやり方で、今の私のテクニックのベースになっているのだと思います。コール先生は当時90歳ぐらいでしたが、とてもお元気でレッスンではいつもピアノで伴奏してくださっていました。先生が使用していたチェロは世界最高峰のチェロ、モンタニャーナの名器“スリーピング・ビューティー”で、目の前にそのような楽器があったことは、今思えば凄いことだったんだなあと思います。

毎週土曜日には、テンプル大学の子供のための音楽教室で、オーケストラ、弦楽四重奏やピアノトリオなど、チェロを始めて直ぐでしたが参加していました。そこでもコール先生はいつもアンサンブルの大切さを教えてくださっていました。夏になるとコール先生が講師をされていた中高大生が参加するサマーキャンプ（なんと六週間という長さ！）にも参加しました。そこでは、週何回かアンサンブル、個人レッスンがあり、週末はコンサート、午後からの数時間の自由時間以外は、アンサンブルや個人の練習で明け暮れます。私は8歳前後で参加していましたが、ほとんど毎日個人レッスンをして下さり、大変可愛がって貰いました。

アメリカ時代の一番の思い出は、コール先生がボーイング（弓の使い方）の教則本のビデオを制作された時に、有名なチェリストのリン・ハレル氏が見本を示し、うまく教えれば小さい子供でもスピッカート（弓を弦から跳ねさせて演奏する方法）などもちゃんとできるのですよ、という例としてビデオの最後に私が出演したことです。芸大卒業後にフィンランドのアルト・ノラス先生のところに留学した時、同じ門下の生徒に、「あのビデオで最後に弾いているジャパニーズボーイはレイかい？」と聞かれました。どうも学校の図書館にそのビデオがあったようで、留学して早々プチ有名人でした。

最近、インタビューの時や、教育に興味をもたれる方に「日本の教育、アメリカの教育、どっちがいいですか。」とよく聞かれます。私自身、日本での幼少期の音楽教育を受けたことはありませんので、どっちが良いかわかりませんが、振り返れば、幼少期はアメリカで自由にチェロを弾き、その楽しさを知り、帰国後はしっかりとした音楽の教育を受けることが出来たこと、アメリカでも日本でも最高の先生方に教えて頂けたことが、いまの私の音楽人生の核になっているように感じます。

これから先、教える立場になった際には、アメリカでの経験そしていろんな先生方から学んだことを伝え、少しでも恩返しできるように努めたいと思います。

辻本 玲（つじもと・れい）／チェロ

11歳まで米国で過ごし、東京藝術大学を首席で卒業。日本音楽コンクール2位および「聴衆賞」、ガスパールカサド国際コンクール3位。齋藤秀雄メモリアル基金賞、青山音楽賞等受賞。ソリストとして、またアルカス佐世保レジデンスカルテット、エクスプローチェ（チェロアンサンブル）、及川トリオBee、日本フィルのソロチェロ奏者などで、活躍中。これまでに、メタ・ワッツ、オーランド・コール、川元適益、上村昇、山崎伸子、アルト・ノラス、アントニオ・メネセスの各師に師事。使用楽器は、イエローエンジェルより貸与されているストラディバリウス1724。

©竹原伸治

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社は、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールをフェニックスタワー内に設けています。芸術・文化の発信基地として、関西の芸術文化発展に寄与しています。

〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10 あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー5F　TEL 06-6363-0211

Copyright(C) 2011 The Phoenix Hall All rights reserved. 本誌に掲載された記事、写真、イラスト等の無断掲載を禁じます。

発行年月　2016年7月
発　　行　あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
編　　集　吉元 晃
デザイン　松井桂三有限会社